

## 1. はじめに

副詞「たぶん（多分）」は、従来の研究では、「推量」（市川 1976 など）や「推量の陳述」（石神 1987）、「推測」（工藤 1982, 2000）と解説されることが多く、文末形式の「だ（です）」と共起する場合と「だろう（でしょう）」と共起する場合とで話し手による確信度が異なると説明される。しかし研究者によって上記の用語ないし定義の違いがあり、「推量」、「推測」の他にも、さらに「推論」、「推敲」、「推定」、「推察」など、文献・資料にも散見する。いずれも、さまざまな種類の副詞を一度に扱い、「分析」ないしは「分類」するためにエティック（etic）な視点（研究者側の視点）（C. Goodwin 1984 など）に基づいた解釈である<sup>1</sup>。

ところが、自然会話データを通して詳細に観察すると、会話の当事者たちの間で、話し手個人による推量あるいは話し手による可能性の判断などだけでは説明しきれない何らかの社会的行為（social action）のために「たぶん」が使用されていることが見えてくる。つまり、相互行為において、聞き手に向けて発話がデザインされる中で、「たぶん」は話し手個人の言い方などとしてだけよりも、インタラクションを組織化していく上でのリソース（resource）となっているらしいことが分かる。そうした使用のあり方は、話し手個人のレベルでは捉えきれない側面が存在し、単に個人による推量や推論などという認知的作業にのみ帰属させられるものではないはずである。

そのため、本稿では、会話分析（Conversation Analysis, CA）ならびに相互行為分析（analysis of interaction）の手法、およびマルチモダリティ（C. Goodwin 2000）の概念を用いて、副詞「たぶん」だけでなく、「たぶん」を含む発話（およびその発話を伴うジェスチャーなどの非言語行動）の連鎖（sequence）を通して、会話の当事者たちが何を行ない、何を達成しているかを、微視的に考察し、記述していく。

<sup>1</sup> イーティック（etic）に相対する概念として、イーミック（emic）がある。それぞれ「phonetic」（音声）と「phonemic」（音素）からの、言語学者 Pike（1954, 1967）による造語であり、文化人類学、質的心理学研究などの分野においても応用されることがある。Pike（1954, 1967）の「車」の例から言うと、イーティック（etic）はさまざまな種類の車の部品を一定の基準を用いて一度にまとめて記述する方法であり、それに対して、イーミック（emic）はある特定の車の全体の構造や機能を詳細に記述していく方法である。会話分析（CA）に関連する解説として、ten Have（1999, 2007）、山田（2004）、池田（2009）などがある。例えば池田（2009）によると、イーティック（etic）な視点は「研究者が比較のために設けた、個別の文化体系にかかわらない外側から規準をあてはめて特徴を記述する視点」（p.13）であるのに対し、イーミック（emic）な視点は「研究対象とする個別の文化体系（言語体系を含む）の“内側”からみて潜在するシステム（または秩序）を発見する視点」（p.13）である。会話分析では、特に後者のイーミック（emic）な視点（またはそれに基づいた情報の抽出）が重要である。

## 2. 先行研究

### 2.1 副詞「たぶん」に関する先行研究

これまでの日本語学の研究では、副詞「たぶん」に限定した議論が少なく、多くの場合、文レベルにおいて、他の副詞や類義表現（例えば「おそらく」、「きっと」、「もしかしたら」、「ひょっとしたら」など）との意味の違いや、推量の助動詞（「だろう（でしょう）」、「と思う」など）との共起または呼応関係<sup>2</sup>に重点が置かれている。「たぶん」の典型的な定義については、「推量」（市川 1976、石神 1987、高橋他 2005 など）や「推量の陳述」（石神 1987）、「推測」（工藤 1982, 2000）、「「きっと」に比べて弱い推量」（森田 1989）、「その可能性が強いことを判断するという語」（茅野他 1987）などがある。

「推量」以外に、「確信度」という観点からもしばしば議論されている。例えば、益岡・田窪（1992）は「確かさの度合を表す陳述の副詞」（p.127）と解説している。また、宮崎他（2002）は「確信度の副詞（または確信度を表す副詞）」（p.129）とし、「たぶん」とその他の類義表現との異同について取り上げている。こうした「推量」や「確信度」、「可能性」などの解説は、副詞「たぶん」そのものの定義について示すことを目的としている。研究者の内省や想定に基づき、整理された人工的なデータを用いて、エティック（etic）な視点（C. Goodwin 1984 など）から得られた解釈である。

言葉の意味・用法について議論する場合、上記の解説や定義の異同は無論重要である。ところが、もし Gardner and Wagner（2004）の「言語は、（人間の社会的）行為（action）を伝達するための媒介手段（vehicle）の一種として働き、それもまた社会的世界（social world）を構成する上での決定的要素（crucial element）となっている」（Gardner and Wagner 2004 : 2、日本語訳は本稿著者による）という視点から考えると、実際の相互行為としての会話の中で「たぶん」が使用されるのは、ただ単にある話し手個人の中の問題として（一方的に推量のメッセージを伝えるため）ではなく、聞き手と協同的にインタラクションを構築していくためであると考えられる。そのため、従来の「推量」、「推測」、「可能性」、「確信度」などのラベルを一旦剥がし、イーミック（emic）な視点（会話参加者側の視点）（C. Goodwin 1984 など）から、「たぶん」という副詞そのものだけでなく、自然会話データを用いて、全体の流れから「たぶん」を含む発話とその前後の文脈を観察し、会話の当事者たちが実際に行なっていること・達成していることを見る必要もある。

<sup>2</sup> 例えば、庵他（2001）では、「たぶん」を「誘導副詞」の中に含めて、「誘導副詞は陳述副詞・文副詞などとも呼ばれるもので、後に続く表現（特定の文末形式）を聞き手に予測させる機能を持っている」、「文末形式（「だろう」、「と思う」）を伴わなくても使える」、そして「モダリティ表現の有無で意味は変わらない」（pp.378-381）と解説されている。

## 2.2 会話分析 (CA) と相互行為分析に関する先行研究

Schegloff (1984) は、英語における「質問形」を例に、「質問形が『質問以外のこと』をなし遂げているのであれば、『ある質問が<質問する>以外のことをなす』のみならず、『その質問形を通して、何が達成されたか』を見なければならぬ」と述べている (Schegloff 1984 : 34- 35、日本語訳は本稿著者による)。また、文や発話の中で「I promise...」や「I bet...」(またはそれを含む発話) が使用されたら、必ず「誓う」や「賭ける」という行為がなされるというわけではない。Schegloff (1984) は Sacks による分析を例に、実際の会話では、「I promise...」や「I bet...」が使用された場合でも、「誓う」や「賭ける」とはまったく関係のない行為 (例えば、「話題を始める」ことなど) がなされ得ると主張している。このように、同じ言語形式であっても、複数の意味、すなわち、あいまいさが存在することがある。ある言語形式が会話の中でその言語形式とはまったく別の行為がなされ得るのは、会話の連鎖の中でその発話がなし得ていることのあいまいさが存在しているからである。会話において、あいまいさがしばしば存在しているにもかかわらず、会話の当事者たちは発話をデザインしお互いに理解し合っているのである<sup>3</sup>。

Schegloff (1984) は、会話の当事者間の理解の構築を精密・緻密に観察するため、会話分析 (CA) というアプローチを使用している。会話分析は、社会学者 Garfinkel によるエスノメソドロロジー<sup>4</sup> (ethnomethodology) を源流として、その後、Sacks、Schegloff らによって展開されたアプローチである (上野 2004 : 104 - 105)。伝統的な社会学の考え方と違って、最初から仮説は立てずに、ありのままの「人々の日常的な出来事」を、録音、録画された自然会話データを用いて、会話の当事者たちの発話そのものだけでなく、視線、ジェスチャーまで緻密に観察し記述する (上野 2004 : 104)。実際、このように、会話分析の手法を使用し日常的な言語使用 (言語によるインタラクション) を調査した社会学の研究者たちは、自然会話データの質的分析を通して、多くの現象や常識だと思われてきた考え方を、新たに見つめ直し

<sup>3</sup> 一方、研究者・分析者が自然会話データの分析に臨む際には「overhearer」(Schegloff 1984 : 50) であり、「会話の中で何が話されているのか (what - is - being - talked - about)」(Schegloff 1984 : 50) が分からない場合がある。

<sup>4</sup> エスノメソドロロジー (ethnomethodology) は、伝統的な社会学における「社会の構造・組織の解明」という研究目標とは異なり、人々の日常的な言語使用または言語によるインタラクションの調査を通して、人々がどのように相手と調整・交渉しながら、社会的な行為・活動を達成し秩序を作り上げていくのか、その様相を記述し解明していくことが重要だと考える (上野 2004 : 104 - 107)。なお、「エスノメソドロロジー」は、直訳すると、「人々」(エスノ) の「方法論」(メソドロロジー) という意味である (G. サーサス他 1989、西阪 1997、上野 2004)。

たり、問いかけたりすることができた<sup>5</sup>。会話分析の強みは、「言語」そのものにとどまらず、「人々が行なっていること」が記述できることにある。

日本語の自然会話データの分析を用いた研究を挙げると、例えば西阪 (2003) は、会話の中で当事者たちが自分 (たち) の物語を語る時に使用されている「らしい」や「ですよ」という表現が発言<sup>6</sup>の内容とその内容に対する発言者の確信の程度とは必ずしも関係があるとは限らないと分析している。「らしい」は単なる「推測」であるというよりは、発言者が「らしい」という表現の使用を通して、相互行為において発言を「伝聞」として組み立てている、と西阪 (2003) は分析している。また、「それぞれの発言はその時々々の参加の構造にふさわしいしかたでデザインされている」(p.69) という。したがって、「重要なのは、相互行為においてその発言が何を行なっているのかである」(p.69) と述べている。

なお、C. Goodwin (2000) は、「会話」は「会話」とどまらず、それよりも広いレベルでの「人間の行為」(human action) で見る必要性を唱えている。C. Goodwin (2000) は、子供たちによる「ケンケン遊び」(hopscotch) と考古学者たちによる「土の色分け作業」という二つのデータを用い、微視的分析を通して、「人間の行為は、一系列の多種多様の記号論的リソースの同時配置によって構築されている」(C. Goodwin 2000 : 1489、日本語訳は本稿著者による) と主張している。

したがって、話し手と聞き手が実際に「行なっていること」および「達成していること」を見るためには、発話 (言語) を観察するだけでは、十分とは言えない。会話データの中から発話と同時に起きているものを捨象したら、発話以外のリソースを通して「行なわれていること」や「達成されていること」はおそらく見えてこない。

以上の先行研究を基に、本研究では、副詞「たぶん」が使用された時の「話し手の確信の程度や心的状態」から出発せず、その代わりに、会話の当事者たちが「たぶん」をリソースの一つとして、どのように他の利用可能なマルチモダルなリソース (C. Goodwin 2000) と共に、発話を組み立て、その発話を通して何が行なわれ、達成されているのかを観察する。

### 2.3 なぜ日本語第二言語話者の言語使用を見るのか

Gardner and Wagner (2004) によれば、「母語話者 (第一言語話者) と第二言語話者が会話を交わすということ」はもはや日常生活において極めて一般

<sup>5</sup> 具体的には、例えば社会とは最初から与えられたもので、人々は社会という枠組みの中で行動するという伝統的な考え方への問いかけがある (上野 2004 : 104)。

<sup>6</sup> 西阪 (2003) では「発言」という用語を使用しているが、本稿では「発話」という用語を使用する。

的な出来事になってきており、第一言語話者同士の会話と同じく「普通 (normal) の会話」として見ることができる。さらに言うと、第一言語話者同士の会話よりも、むしろ、逆に第一言語話者と第二言語話者による会話・相互行為のほうが「文法」、「コミュニケーション」のあり方について新たな示唆を与えてくれる場合もある。しかしながら、これまでは、第二言語話者の発音や文法的な誤りが問題として扱われてきたのである (Gardner and Wagner 2004 : 1- 3)。日本語第一言語話者と同じく、日本語第二言語話者が実際に「日本語」を「使用」し、日本語第一言語話者と共に何らかの「実践を行なっている」という事実を目を向けることは、彼らが発話などを通して「行なっていること」を見る必要性を浮かび上がらせる。発音や文法の誤用などの個人のレベルの問題を超えた相互行為のレベルにおいて、日本語第二言語話者がどのように日本語をリソースの一種として、同時に、他の利用可能なマルチモダルなリソース (C. Goodwin 2000) との組み合わせを通して、日本語第一言語話者とインタラクションを構築し、その過程の中で何を行なって、何を達成しているのかを微視的に見ることは、従来ほとんど試みられていない重要な作業である。筆者手持ちの日本語第二言語話者と中国語第二言語話者による自然会話データを観察したところ、副詞「たぶん」を含む発話が多用されていることが分かった。日本語第一言語話者や、日本語第二言語話者のそれぞれの個人の特徴とは別に、本稿では、相互行為の観点から分析していく。

### 3. データ分析

#### 3.1 データについて

本稿で使用しているデータは、日本語第二言語話者 (中国語母語話者) と中国語第二言語話者 (日本語母語話者) による自然会話・インタラクションの様子を録画したものである。日本語第二言語話者の Y は、データ収録時 (2008 年 4 月)、某大学の大学院に在籍していた。日本語母語話者の F は、某大学の学部生であり、中国語を第二外国語として勉強していた。Y と F はいわゆる「language exchange」という語学交流活動を普段定期的に行なっている。そのため、使用言語は、原則的にそれぞれの第二言語であった。時には、自分の第一言語 (母語) に切り替えて質問したり補足したりすることもあったが、主に Y は日本語を、F は中国語を使用していた。

データ収集の際、研究調査の詳細内容とデータの使用方法について、事前に説明し、Y と F 双方の同意を得て、同意書に署名をしてもらった上で、ビデオ撮影を行なった。録画はビデオカメラ (SONY 3CCD Handycam DCR-TRV 900) を三脚の上に設置し、録音は外部マイクを机の上 (Y と F の間) に置いて行なった。なお、機材の配置を除き、座り方や物の配置 (図 1)

は、研究調査者（筆者）から働きかけることは一切なく、収録当日、YとFがその場で決めていた<sup>7</sup>。次節から、データの中からいくつかの事例の分析を提示する。まず、「たぶん」を含む発話（の連鎖）がどのような環境で現れているのか、その現れ方に注目する。そして、YとFが「たぶん」を含む発話連鎖の中の一つ一つの発話を通して実際に何を行なっているのか（何が行われているのか）を微視的に観察し、記述する。

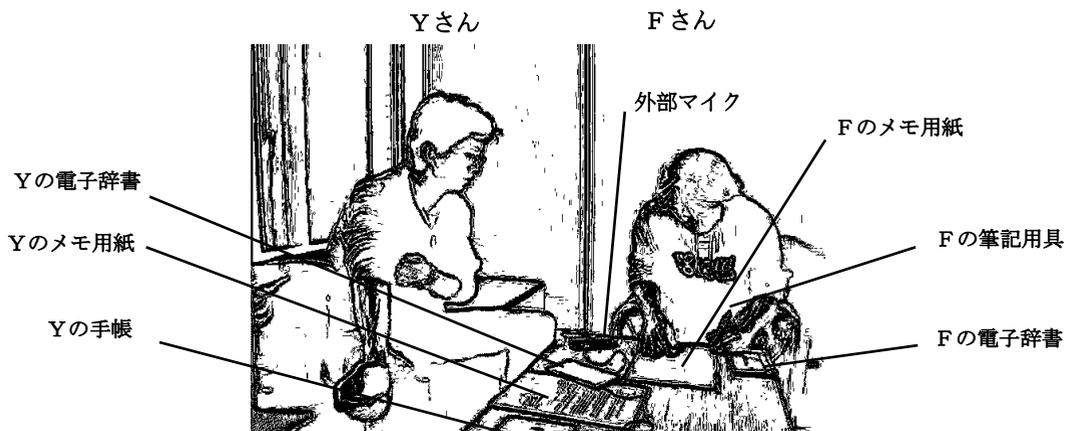


図1 配置

### 3.2 事例

#### 3.2.1 「答えや意見の提出の準備をしていること」を投射する「たぶん」

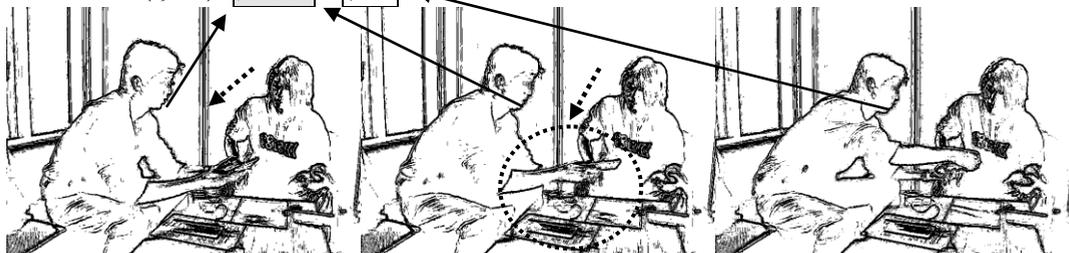
【事例1】 Y＝日本語第二言語話者（中国語母語話者）、F＝中国語第二言語話者（日本語母語話者）。Fは、日本語の「ヒッチハイク」を中国語でどう表現し説明すればいいかとYに質問している。

- 01 F：え？<sup>yao4 shi4</sup> 要是（.）<sup>yao4 shi4</sup> 要是（.）えっと：<sup>fan1 yi4</sup> 翻訳（.）<sup>fan1 yi4 de0 hua4</sup> 翻訳的話<sup>8</sup>  
 （（「翻訳的話（fan<sup>1</sup> yi<sup>4</sup> de<sup>0</sup> hua<sup>4</sup>）」と発話する時、一瞬視線をYに送り、その後、Yの電子辞書に視線を向ける。その間、YはFを注視したままである））
- 02 Y：はい （（Fを注視する））

<sup>7</sup> 本稿のデータは、YとFに協力を依頼し、同意を得た上でビデオ撮影を行なったものである。この点において、「完全に」自然な会話データであるとは言えない。しかしながら、従来の多くの研究で使用されてきた実験的場面での会話データと比較すると、研究調査者（筆者）からの働きかけや指示を一切受けることなく、会話の当事者たちがその場でお互いに必要に応じて会話を進めているという点において、より実際のインタラクション場面での会話データであると言える。

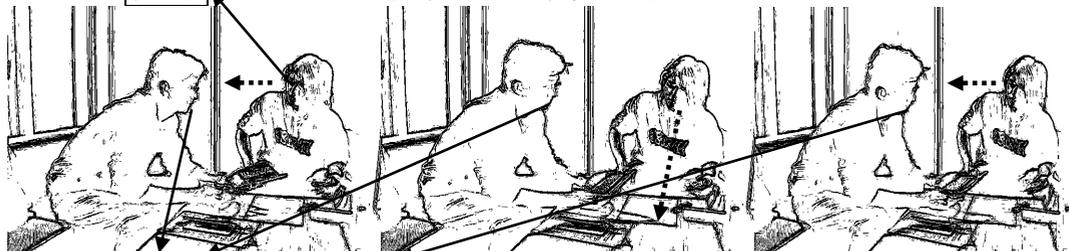
<sup>8</sup> 「もし翻訳するとしたら」。中国語の助動詞＋動詞の「要是（yao<sup>4</sup> shi<sup>4</sup>）」は、日本語の副詞「もし（も）」に相当する。「翻訳（fan<sup>1</sup> yi<sup>4</sup>）」は日本語の動詞「翻訳する、訳す」とほぼ同義で使われる。「的話（de<sup>0</sup> hua<sup>4</sup>）」は仮定形で、日本語の「たら」に相当する。

- 03 F : えっと : : 這個 : =  
 04 Y : =これ? (あ) こういう言葉?  
 05 F : うん  
 06 Y : ですか?  
 07 (.)  
 08 F : えっと : ((自分の紙を見ながら))  
 09 Y : はい ((Fを注視する))  
 →10 F : 怎麼 怎麼 (.) 怎麼 : : 説明<sup>9</sup>  
 →11 Y : (うん) たぶんこれ : :



((YがFに身体ごと自分の電子辞書を近づけて画面を見せながら「(うん) たぶん」と発話すると、Fはすぐ視線をYの電子辞書の画面に向け始める。Yは「これ : :」と発話した後、右手の親指で自分の電子辞書の画面にある字を指差し、Fに示す))

- 12 Y : こういう : あの翻訳 (.) いいんじゃないですか  
 ((「こういう : 」と発話する時に自分の電子辞書の画面を右手の親指で指し示す。FはYの電子辞書の画面を続けて見る))  
 →13 F : [分かる?]  
 →14 Y : [攔車旅行] ((Fは13行目で「分かる?」と発話すると同時に、視線をYの電子辞書の画面からそらし、Yに視線を向け、はっきりと注視する。一方、Yは14行目で自分の電子辞書の画面を指差し、見せたままの姿勢をとる))  
 →15 F : すぐに  
 ((FはYを注視した後、視線がYと自分の紙の間で行き来する))

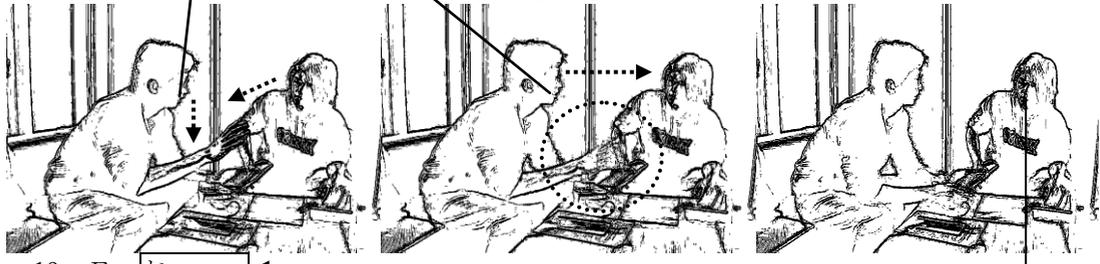


- 16 Y : hhh う : : : ん たぶ : ん あ の ぱと 最初には : =  
 ((Yは電子辞書を見つめながら、. hhhと吸気音と同時に、身体を元の位置に戻す。「う : : : ん」と言い淀む時、Fは一瞬視線を自分の紙に戻す。そして、Yが自分の電子辞書を両手に持って、画面を見つめたまま「たぶ : ん」と発話すると、「ぶ」の時に、Fは視線をYに戻し、注視する))

<sup>9</sup> 「どうやって説明すればいいですか」。「怎麼 (zen<sup>3</sup> me<sup>0</sup>)」は、日本語の「どうやって」、「どのようにして」に相当し、「説明 (shuo<sup>1</sup> ming<sup>2</sup>)」はここでは名詞ではなく動詞であり、「説明する」の意。

→17 F : とうん ((頷いた後、一瞬視線をYからそらす))

→18 Y : あのたぶん 分からない ((Yが電子辞書の画面を見つめたまま「あのたぶん」と発話すると、Fは、先一瞬そらした視線をYに戻す。Yは顔を上げると同時に視線をFに向けて「分からない」と発話し、右手を下ろす。Fはもう一度視線をYからそらす。下を向いて、19行目で「お：：：」と頷く))



→19 F : お：：：  
((軽く頷きながら、机の上の紙を見る。その後、また視線をYに向ける))

20 Y : と 思 っ て (.) た だ : (1.0) .h (.) あ の (.) こ の : 言 葉 ? =  
((自分電子辞書を見ながら「と 思 っ て」と発話する。Fは細かく頷くが、一瞬よそ見をする。Yは、「この：」と発話する時、指を電子辞書の画面の上で回しながらFを注視する。「言葉？」と発話しながら、右手で電子辞書と示す。一方、Fは右手で頬杖を突いて、下を向いたまま紙を見ている))

21 F : とうん ((右手で頬杖を突いて、メモを取ろうとする))

22 Y : あのちゃんと : 頭に考えれば : ((視線がFと自分の電子辞書の間で行き来する))

23 F : うん ((頷きながらメモを取る))

24 Y : あの分かるか [もしれない] ((電子辞書と机を交互に見ながら発話))

25 F : [お：： ] °ほほほ° ((メモを取りながら相槌を打つ))

26 Y : はい ((電子辞書を見ながら))

27 F : う：：ん ((メモを書き終えて、ボールペンを持ち上げる))

この事例は、Fによる質問から始まっている。Fによる質問は、01行目と10行目での(中国語の)発話を通してなされる。Fは01行目で日本語の「ヒッチハイク」を中国語に翻訳するとしたらどう表現すればいいかとYに質問する。その後、02行目から06目まで、YがFに確認するやりとりが見られる。07行目での短いポーズの後、Fは08行目で「えっと：」とターン(turn)を取り始める。Yは09行目で「はい」と相槌を打ち、Fの次の発話を聞く準備をする。

Fは、01行目での続きの発話として、10行目で、中国語で発話する間、Yに視線を向ける。一方、YはFが言い淀む間、視線を変えて、自分の電子辞書を見つめる(図2と図3)。Fの質問を受けて、Yはそれについて応答する。Yはまず自分の電子辞書から「攔車旅行(lan<sup>2</sup> che<sup>1</sup> lu<sup>3</sup> xing<sup>2</sup>)」という言葉を見つける。11行目で、Yの微かに聞こえる「うん」と、伸ばし音を含む「たぶんこれ：：」の発話とともに、身体的位置がはっきりと変わり、

Fに身体ごと自分の電子辞書を近づけ、画面を見せる。Fは、同じ11行目で、Yの「たぶん」を聞いた時点で、自ら視線の送り先を、YからYの電子辞書の画面へと変え、注視し始める（図4と図5）。Yは、「これ：：」と発話した後、Fに電子辞書の画面の字が（よりはっきり）見えるように、自分の電子辞書の画面にある字を右手の親指で指差す（図6）。Fが電子辞書を注目しているのを受け、12行目で「こういう：あの翻訳（.）いいんじゃないですか」とYは発話を続ける。

10 F: 怎麼 怎麼 (.) 怎麼 : : 説明

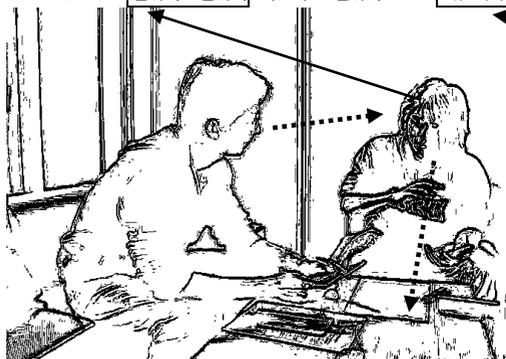


図2

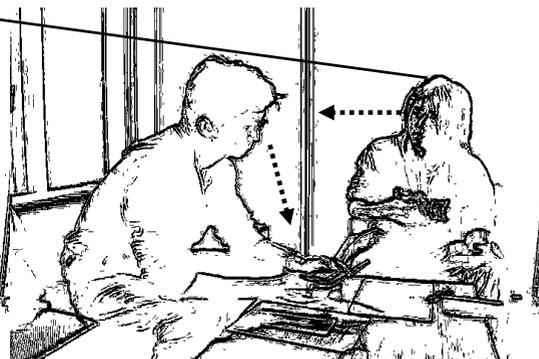


図3

11 Y: (うん) たぶんこれ : :



図4

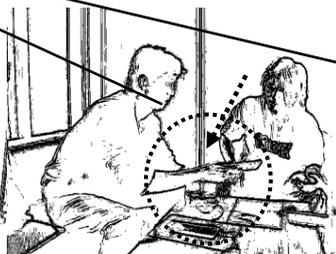


図5

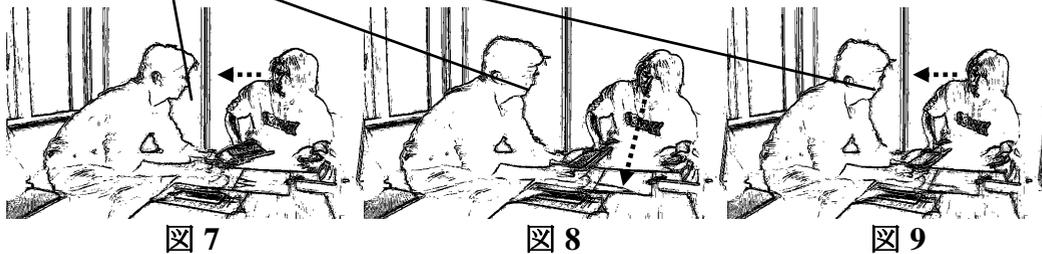


図6

10行目から12行目までのやりとりは、典型的な「質問—応答」である。11行目での「たぶんこれ：：」というYの発話は、Fの質問を受けた直後に発話され、「相手に（自分の）身体ごと電子辞書を近づけて画面を見せるジェスチャー」という非言語行動を伴っている。また、Yは「たぶん」だけでなく、伸ばし音の「これ：：」や、ジェスチャーや、人工物（電子辞書）などのリソースを組み合わせ、Fへの「応答」の発話を組み立てる準備をする。一方、図3に示すように、Fは、それを受けて、すぐ自ら視線の送り先をYからYの電子辞書へと変え、画面を注視し始める。ここで、YとFに

よって行なわれていることは、ただ単に「質問—応答」だけでない。それと同時に、Yの11行目での「たぶんこれ：：」という発話は、Fに「答えや意見の提出の準備をしていること」を「投射<sup>10</sup>」(project)しているように見える。実際、それを受けたFは、すぐ自ら視線の送り先を、「Y」から「Yの電子辞書」へと変え、画面を注視し始め、聞く準備をしている。Yは、Fが電子辞書の画面の字を注視してくれているのを知り、「こういう：あの翻訳( )いいんじゃないですか」と12行目で発話を続けると同時に、質問を受けた「話し手」として、中国語母語話者としての自分の「意見」(opinion)を提出する。Fは、12行目のYの「意見」を受けて、13行目と15行目で、「分かる?」、「すぐに」と発話し、一般的にその言葉を中国語母語話者は聞いたらすぐ理解できるのかと、さらに聞き返す。それと同時に、FはYを注視する。Yは、Fの「分かる?」、「すぐに」という発話を(追加の)質問として受けとめ、16行目で、「.hhh」とやや長い吸気音と同時に、Fから少し離れる(図7と図8)。その直後、「う：：：ん」と言い淀む時、Fは一瞬視線を自分の紙に向ける(図8)。Yが続けて「たぶ：ん」と発話すると、「ぶ：」の時点で、Fは紙に向けている視線をYに戻し、Yを注視する(図9)。

16 Y : .hhh う：：：ん たぶ：んあの ぱっと最初には：＝



一方、Yは、16行目で「たぶ：ん」と発話する時、Fを見ているわけではない。Yは自分の電子辞書を両手に持って、画面を見つめたままである。

<sup>10</sup> 「投射」の定義について、串田(2006)は、「時間の進行の中で言葉が用いられているとき、ある時点までに発せられる言葉は、その発話の統語的形狀(すぐ次の瞬間にどんなタイプの統語要素が発話されそうか、その発話はどんな統語構造をとりそうか、など)、その発話の種類(その発話はどんな行為を行うものになりそうか)、その発話の完了可能点(その発話はいつ完了しそうか)、を予示・予告する性質がある。いいかえると、聞き手は進行中の発話をリアルタイムで分析することで、以上のことについて予測することができる。進行中の言葉が、これらのことを予示・予告することを「投射」という」と書いている(p.53)。また、林(2008)は、「投射はある行為が完全に産出されてしまう前に、それがどのような行為なのか、そしてその次に適切(relevant)になる行為は何かを予測することを可能にする」と書いている(p.16)。

しかしながら、16行目で「たぶ：ん」が発話された前後の、Fによる視線の変化から分かるように、Fは、Yの「たぶ：ん」の後続の発話を聞こうとしている。ここでのYの「たぶ：ん」という発話は、「(今、これから・このあと、次に) 答えや意見が (Yによって) 提出される」ことを投射している。そのため、Fは「たぶ：ん」の次に来る発話を聞こうとし、聞き手としての志向を示していると考えられる。

ここで、「たぶん」と「確信度」(確信の程度)との関連について一度考えてみたい。まず、11行目での「たぶんこれ：：」と違い、16行目でのYの「.hhh う：：：んたぶ：ん」の発話の中の「ぶ」のところに、伸ばし音が観察される。伸ばし音の有無によって、何かが異なるのだろうか。例えば、「たぶん」か「たぶ：ん」か(さらに、「たぶ：：ん」、「たぶ：：：ん」など)によって、Yの「確信度」は変わるかどうかといった議論は可能なのだろうか。実際、Yは16行目で電子辞書や他の情報源など一切なしに発話している。「攔車旅行 (lan<sup>2</sup> che<sup>1</sup> lu<sup>3</sup> xing<sup>2</sup>) という言葉(表現または造語)を、中国語母語話者は一般にすぐに理解できるのか」というFの質問について、電子辞書には関連情報が載っていないため、Yは自分の判断でこの質問に答えなければならない。根拠となる情報がない、もしくは自分なりの判断で答えるしかないため、話し手は発話の内容に対する自信もしくは確信の程度が低くなり、その結果、「たぶん」に伸ばし音を伴った、という議論も可能なかもしれない。しかし、以上の事例を観察する限りでは、11行目でYが「たぶんこれ：：」と発話しているのも、16行目で「.hhh う：：：んたぶ：ん」とYが発話しているのも、決してY個人だけの問題ではない。むしろ、Yが「Fに答える準備をしている」という事実と、その後の聞き手としてのFによる反応に注目する必要がある。「たぶん」を含む各発話は、(今) Yが答えや意見の提出の準備をしていたり、(これから・このあと) Yが自分の答えや意見を言い始めたり、(次に) Yの答えや意見が来たりすることなどを投射している。そうでなければ、Fは「聞き手としての志向」を示さず、さらに「話し手として」質問を補足したりすることも可能なのである。このように、相互行為としての会話において、「たぶん」(「たぶん」の音声的な要素も含めて)の使用は、ただ単に「話し手個人」の自信のなさの現れや、確信の程度の問題であるというより、「会話の当事者たち」による社会的なものなのである<sup>11</sup>。

<sup>11</sup> 第二章の先行研究の中で述べたように、西阪(2003)は、発言者が会話の中で「らしい」や「ですよ」などの表現を通して、発言を「伝聞」として組み立てる時、発言内容そのものの性質も、それに対する確信の程度も、おそらく無関係であり、重要なのは、相互行為において、その発言が何を行なっているのかである、と分析している。

では、Yは、16行目の「たぶん」を含む発話の後、次の（後に続く）発話をどのように組み立て、「攔車旅行 (lan<sup>2</sup> che<sup>1</sup> lu<sup>3</sup> xing<sup>2</sup>) を中国語母語話者は一般にすぐに理解できるのか」というFの質問に答えているだろうか。そして、聞き手としてのFの反応はどうだろうか。事例1に戻ると、16行目でYは「.hhh う：：：んたぶ：ん」の直後に「あのぱっと最初には：」と発話を続ける。一方、FはYを続けて注視する。Yは「.hhh う：：：んたぶ：ん」と発話した直後、右手を高く上げ、「あの」と発話すると同時に、右手（手のひら）をぱっと開く。「ぱっと」と発話すると、右前方を押ししていくようなジェスチャーをする。「最初には：」の「最」と発話する時、YはFと視線が合う。「最初には：」という発話の直後に、Yが頷くと、Fは、すかさず「うん」と相槌を打ち、頷いた後、一瞬視線をYからそらす。そして、18行目でYは「あのたぶん分からない」と発話する。Yが（電子辞書の画面を見つめたまま）「あのたぶん」と発話すると、Fは先一瞬そらした視線をYに戻す。Yが顔を上げると同時に視線をFに向けて「分からない」と発話し、右手を下ろす。一方Fは、再び視線をYからそらし、下に向いて、19行目で「お：：：」と頷き、はじめて理解を提示する。このように、Yが「あのたぶん」と発話すると、Fは先一瞬そらした視線をYに戻し、Yの「あのたぶん」の後続の発話（つまり、Yの答えや意見）を聞こうとしている。そして、「あのたぶん」の直後に、「分からない」というYの答えや意見が来ている。18行目での「あのたぶん分からない」というYの発話は一見、切れ目がないように見える。しかし、Yは「あのたぶん」と発話する時、Fを見ているのではない。Yは、自分の電子辞書を見ているのである（図10）。その一方、Fは「あのたぶん」と聞き、17行目で「うん」と頷いた後、一瞬そらした視線をYに戻す（図10）。その後、Yは顔を上げると同時に視線をFに向けて「分からない」と発話し、そこでFと視線が合う（図11）。



図 10

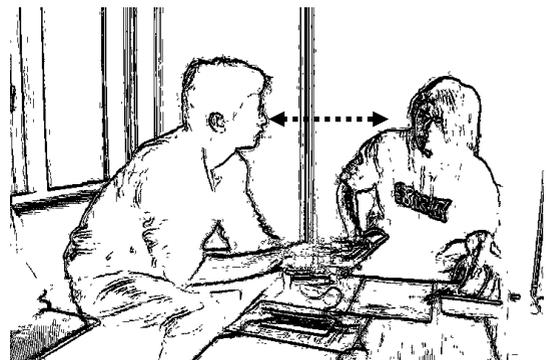


図 11

18行目でのYの発話はひとつながりのように見えるが、実際には、「あのたぶん」と「分からない」の間に、YとFの視線が変わっている。ここでは、「あのたぶん」の直後に「これから（次に）意見を述べる」という投射がなされていると考えられる。一方、Yの「あのたぶん分からない」という発話の直後に、Fは、はじめて「お：：：」と自分の理解を提示する<sup>12</sup>。

このように、事例1で3つの「たぶん」を含む発話連鎖を観察した現象について述べると、Fからの質問を受けて、Yは「たぶん」を含む発話を通して、「応答」の発話をデザインし組み立てている。また、発話が構築される中、「たぶん」を含む発話は「答えや意見の提出の準備をしていること」を投射し、それを受けて、Fは、「聞き手としての志向」を示し、Yに視線を向け、「たぶん」に後続する発話を聞こうとする。

### 3.2.2 「結論をアナウンスすること」を投射し、今の発話を話者自身の答えや意見としてマークする「たぶん」

【事例2】（Yは、中国語母語話者は一般に「攔車旅行（lan<sup>2</sup> che<sup>1</sup> lu<sup>3</sup> xing<sup>2</sup>）という言葉を理解できるのか」というFからの質問について、追加の説明をしている。）

- 28 Y：もしあのh そういう： あのなんだろう（.）映画  
 （（Yが「もし」と上を見上げながら発話すると、Fは急に視線をYに向けるが、その後、一瞬、視線をはずし、また視線をYに戻す。一方、Yは「なんだろう」と発話しながら俯く。「映画」と発話しながら頷いて、電子辞書を見る）
- 29 F：う：ん（（視線を机に向ける））
- 30 Y：見た時（（Fに視線を向けて））
- 31 F：お [：：]（（顔を上げてYを注視する。数回細かく頷く））
- 32 Y： [を：]：覚 [えて ] きたん（.）だったら
- 33 F： [あ そかそか ] うん

<sup>12</sup> 18行目のYによる「あのたぶん分からない」の発話の後、Fは19行目で「お：：：」と、自分の理解を提示するが、Yは18行目に続いて20行目で「とって（.）ただ：（1.0）.h（.）あの（.）この：言葉？」とさらに発話する。Fは、21行目で「うん」と相槌を打つと同時に、右手で頬杖を突きながらメモを取ろうとする。Yは22行目の「あのちゃんと頭に考えれば：」と、24行目の「あの分かるかもしれない」と発話しているが、FはYを見ずに、右手で頬杖を突いたまま、メモを取りながら25行目で「お：：」と発話し、微かに聞こえる「ほほほ」と理解（またはYからの情報を受け取ったというサイン）を再度提示する。なお、Yが26行目で「はい」と発話すると、Fは27行目で「う：：ん」と相槌を打ち、ボールペンを持ち上げる（＝メモを書き終える）と同時に、頬に当てた右手を下ろす。このように、Yは「あのたぶん分からない」という意見を言った後、「・・・れば」や、「・・・かもしれない」を使用して追加の発話を組み立てるも、Fは、Yが18行目で「あのたぶん分からない」と発話した時点で、すでに「Yからの答えや意見を得ている」という振る舞いを示している。

((32 行目で Y は「を : : 覚えて」と発話する時、F を注視する。  
一方、F は 33 行目で「あ そかさか」と下を向いて細かく頷く。  
Y は「きたん」と発話する時、F から視線をそらす。「だったら」  
と発話する時にはまた視線を F に向けるが、「だったら」の直後、  
視線を自分の電子辞書の画面に戻す。一方、F は「あ そかさか」  
と頷いた後、下を向いて、視線を机に向ける))

- 34 (.)
- 35 Y : たぶん ((「たぶん」と発話すると同時に、F に視線を向ける。  
一方、F は下を向いたまま))
- 36 F : あ ((下を向いたまま「あ」と言い、細かく頷く))
- 37 Y : 三十秒 (.) あ : : あの違う あ : 三、五秒  
((Y が「三十秒」と発話すると、F は一瞬顔を上げて、Y を見る。  
一方、Y は F を見ている。その後、Y は「あ : : あの違う」首を  
細かく横に振りながら言い淀み、視線を F からそらす。Y が「あ :  
三、五秒」と発話を続け、また視線を F に戻す))
- 38 F : 三 h [五秒 hhh ] ((笑いながら視線を机や紙に向ける))
- 39 Y : [超 h え h な h い h] かかって分かる  
((Y の視線は F と自分の電子辞書の間で行き来する。  
一方、F の視線は机にある))
- 40 F : ふ : ん ((頷きながら、視線は机に向けている))
- 41 Y : [分かることに] なる ((視線を自分の手にとっている電子辞書に戻す))
- 42 F : [へ : : : ] ((視線を机か紙に向けたまま))
- 43 Y : はい ((視線は自分の手にとっている電子辞書にある))
- 44 F : °そっか ((視線は机か机の上の紙にある))

事例 2 の中、35 行目での「たぶん」という発話によって行なわれていることは、事例 1 とどう異なっているだろうか。事例 2 では、事例 1 に引き続き、F による追加の質問「攔車旅行 (lan<sup>2</sup> che<sup>1</sup> lu<sup>3</sup> xing<sup>2</sup>) という言葉を中国語母語話者は一般にすぐに理解できるのか」について、Y によって説明がなされる。35 行目での「たぶん」という発話が出現するまで、「Y による説明」とそれに対する「F の相槌」だけでなく、その都度の Y と F の「視線の変化」も観察される。

F は、29、31、33 行目での発話を通して、「すでに分かっている」ということを Y に提示している。まず、28 行目で、Y は「もしあの h そういう : あのなんだろう (.) 映画」と発話し別の話題を導入することを通して、追加の質問に対する答えや意見の説明を行なっているように見てとれる。実際、Y が 28 行目で上を見上げながら「もし」と発話すると、F は急に視線を Y に向けるが、その後、一瞬視線をはずし、また Y に戻す。Y は、「そういう : あのなんだろう」と発話しながら俯き、「映画」と発話を続ける時、一回頷く。一方、F は「映画」という発話を聞き、視線を下 (机) に向けて、「うん」と相槌を打つ。30 行目で、Y は「見た時」と発話を続けると、一瞬、

顔を上げて視線をFに向ける。するとFは、31行目で「お：：」と発話し、細かく頷き、Yによってまだ言われていない何かをすでに読み取っている振る舞いをする。Fの「お：：」の伸ばし音と重なって、Yは32行目で「を：：」と発話する。Yが続けて「覚えて」と発話すると、Fは33行目で「あ そかそか」、「うん」と、自分の理解を提示している。なお、33行目で、Fが「あ そかそか」と頷いた後、視線を下（机もしくは机の上に置いてある紙）に戻す。Yは、34行目の短いポーズの後、視線を自分の電子辞書からそらし、Fを見て35行目で「たぶん」と発話する。一方、Fは、視線を机（机に置いてある紙）に向けたまま、36行目で「あ」と言って、細かく頷く（図12）。Yが37行目で「三十秒」と発話すると、下に向いていたFは、顔を一瞬上げてYを見る（図13）。

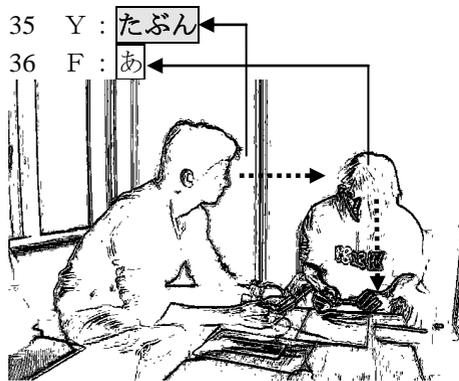


図 12

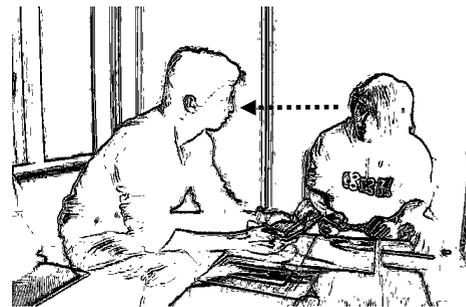


図 13

35行目の「たぶん」は、ターンの中で単独に出現する。この「たぶん」の発話の次に何かがあることが投射され、その後相手（F）が聞き手としての志向を示しているように見える。しかし、Fはすでに29行目の「う：ん」と、31行目の「お：：」、33行目の「あ そかそか」、「うん」で自分の理解を提示している。したがって、35行目でのYの「たぶん」を受けて、36行目でのFの「あ」と数回細かく頷くのは、「聞き手としての志向を示している」というより、「すでに分かっている」とYに提示していると見てとれる。その裏づけとして、Yが37行目で「三十秒」と発話すると、Fは一瞬顔を上げてYを見る。Fが顔を上げたのは、Yの35行目での「たぶん」の発話の時点ではなく、37行目での「三十秒」に反応しているからである。事実、37行目でのYによる「三十秒（。）あ：：あの違う あ：三、五秒」という発話を受けて、Fは38行目で笑いながら「三、五秒」と発話し、40行目と42行目で、何らかの新しい情報を受け取ったことを示す「ふ：ん」と「へ：：：」

という反応を提示している。Yが37行目で「三十秒」と言い出す前に、Fは、35行目の「たぶん」はYの結論をアナウンスするものであってここで説明が終わるという理解を示していると考えられる。このように、34行目での「たぶん」は、YとFの間では、答えや意見の説明はそろそろここまでで、「結論をアナウンスする」ことを投射していると見ることができる。

Fの36行目での「あ」とそれに伴う「下を向いたまま、数回細かく頷く」という反応と、37行目でYが「三十秒」と発話し、Fが「一瞬顔を上げて、Yを見る」という反応の変化は、Yが35行目で「たぶん」と発話した時点で、Fは、それを「Yによる答えや意見の説明がそろそろ終わる」と見なし、Yが37行目で「三十秒」と発話した時点で、Fはそれを「Yからの新しい情報」と理解しているように見てとれる。事実、28行目での「もしあのh そういう：あのなんだろう(.)映画」と、30行目での「見た時」、32行目での「を覚えてきたんだったら」というYの発話を受けて、Fは29行目での「う：ん」と、31行目での「お：：」、33行目での「あ そかそか」、「うん」などの発話を通して、Yに理解を提示している。32行目での「を覚えてきたんだったら」と、34行目での短いポーズの直後に「たぶん」が35行目に出現していることで、それまでのYによる発話(追加説明)がまとまる、と先読みすることはお互いにとって可能である。

35行目の「たぶん」の発話の後、37行目と39行目に「三十秒」や「三、五秒(を超えない)」とあるが、必ずしも中国語母語話者なら三、五秒以内に「攔車旅行(lan<sup>2</sup> che<sup>1</sup> lu<sup>3</sup> xing<sup>2</sup>)」の意味が分かる(ピンと来る)わけではない。これはあくまでYによる答えや意見である。そのため、35行目の「たぶん」は、「話者自身の答えや意見としてマークしている」ものであると見なすことができる。

次に、事例2の続きから、「たぶん」を含む発話が「結論をアナウンスすること」を投射し、「今の発話」を「話者自身の答えや意見としてマークする」という現象について、さらに考察する。

- 45 Y: た [だ ] あのぼっと (.) あの: ((視線は自分が手にとっての電子辞書に))  
 46 F: [うん] ((視線は下に向けたまま))  
 47 (.)  
 48 Y: 分からないほう (.) [あ:] の人が  
 49 F: [うん] ((Yは48行目で「分からない」と発話する時、顔を上げて視線をFに向ける。一方、Fは「うん」の相槌の後、顔を上げて一瞬Yを見るが、また下に向ける))  
 50 (.)

- 51 F : [多い] ((「多い」の発話がYと重なり、一瞬Yを見る))
- 52 Y : [大勢] [大勢] ((「大勢」の発話がFと重なり、Fを見た後、電子辞書を見る))
- 53 F : [うん] うん う：ん= ((視線は下に向けたまま))
- 54 Y : =**たぶん** (.) いる：：ん (.) です ((Yが「たぶん」と発話した時、YもFも下を向いている。Yは「たぶん」と発話した後、「いる：：」と発話する時、一旦Fに視線を向けて、その後、電子辞書に視線を戻し、「です」と発話する。一方、Fは暫く下を向いたまま、細かく頷く))
- 55 (.)
- 56 F : °そう (か) ° ((小さい声で発話する。視線は机か紙に向けたまま))
- 57 Y : あ はい ((Fに視線を向ける))
- 58 F : で： (.) そう (1.0) こっから： ((紙に何かをなぞる))

上記の事例2の続きに出現する「たぶん」を含む発話は、よりはっきりした形で、「結論をアナウンスすること」を投射し、「攔車旅行 (lan<sup>2</sup> che<sup>1</sup> lu<sup>3</sup> xing<sup>2</sup>) を聞いて、ぱっと分からない人のほうが多い」という「今の発話」を「話者自身の答えや意見としてマーク」している。45行目で、Yの「ただあのぱっと (.) あの：」の、「ただ」の「た」で、Fは46行目で「うん」と相槌を打つ。47行目での短いポーズで、Yは息を吞んでいる。48行目でYが「分からないほう (.) あ：の人が」と発話を続け、49行目でFの「うん」という相槌が見られる。すなわち、Fはこの時点では、まだ聞き手として振る舞っている。50行目でまた短いポーズの後、Fは51行目で「多い」と発話し、Yの52行目での「大勢」という発話と重なっている。Fによる51行目での「多い」という発話は、Yの48行目での発話を引き受けると同時に、再度自分の理解をYに提示している。特に、Fは53行目でYを見ずに下を向いたまま「うん うん う：ん」という相槌を打ち、「相手がこれから言おうとしていることをすでに理解している」とYに提示している。53行目でのFの「う：ん」の発話の直後、Yは、すかさず53行目で「たぶん (.) いる：：ん (.) です」と発話する。

ここでの「たぶん」は、前(53行目)のFによる「う：ん」とラッチ (latch) している。54行目でYが「たぶん (.) いる：：ん (.) です」と発話する間、Fは暫く視線を下に向けたまま、細かく頷いている(図14、15、16)。

52 Y : [大勢] [大勢]  
 53 F : [うん] うん う : ん =  
 54 Y : = たぶん (.) いる : : ん (.) です

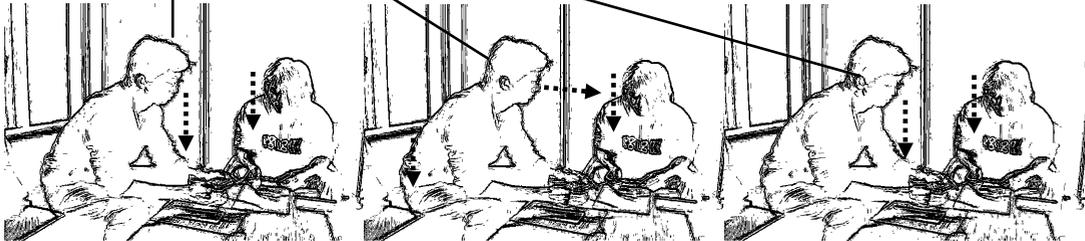


図 14

図 15

図 16

54 行目でのYの「たぶん (.) いる : : ん (.) です」という発話の後、55 行目で短いポーズが入り、Fは 56 行目で小さい声で「そう (か)」と発話する。57 行目でYが「あ はい」とFに視線を向けると、58 行目でFは「で : (.) そう (1.0) こっから : 」と発話しながらボールペンで紙に何かをなぞり、最初的话题 (個人旅行の物語の話) に戻ろうとする。

このように、53 行目での「う : ん」とラッチした 54 行目での「たぶん」を含む発話は、Yの「説明が完了し、結論をアナウンスしていること」を投射していると考えられる。そして、その時点までに、YとFによる発話の重なり (51 行目から 53 行目まで) と、Yを注視せず下を向いたままのFによる非言語行動 (53 行目) などが観察される。「Yによる説明」の「終結の作業」は、Y一人によってではなく、54 行目での「たぶん」を含む発話の後、YとFの双方によってなされている。

以下の事例3でも、事例1で観察された現象と同様、話し手のYによる「たぶん」を含む発話の後で、Fが発話をせずに聞く志向を示し、聞き手としての役割をとり始めるという現象が観察される。ただ、事例3では、YとFによって行なわれていることはこれまでの事例とはすこし異なっている。

### 3.2.3 発話権を取得/譲渡する「たぶん」

【事例3】 (Fは、個人旅行の物語について語り、Yは、その経緯について確認している。Fは、まず、札幌から函館へバイクで行き、函館から青森まではフェリーを利用。本州での旅行の途中、ヒッチハイク (Hitch hike) を利用している。)

01 F : 然後 : 去 (.) 青 (.) 青森  
 ((紙に絵を描きながら発話する。その間、YはFが描いているものを注視する))  
 02 Y : え? (.) これが : =

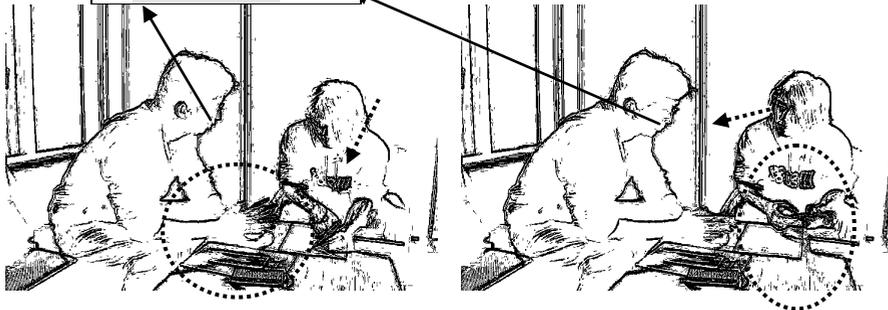
- ((「え」と発話すると同時に、右手の人差し指を出して、Fが書いているところを指差す。そして、Fの紙を注視する。一方、Fは描き続ける))
- 03 F : =はい ((描く構えを維持したまま))
- 04 Y : (.) あの : : [「なんだろう」] ((Fに視線を向けて、右手の手のひらを上に向けて、それを回しながら発話する。一方、Fは紙に描く構えを維持したまま))
- 05 F : [「ここ?」] ((描く構えを維持したまま))
- 06 (1.0) ((YはFを注視し、Fは描く構えを維持する。それぞれ自分の構えで一旦停止する))
- 07 Y : あの 海の : (.) どんぞこの : トンネル : ですか あ違う (1.0) 船
- 08 F : あ 船 うん そう (.) トンネ [ル (つが)] ((描く構えを維持したまま、頷きながら発話する))
- 09 Y : [「フェ フェ」] フェ フェリー ((Fを注視しながら発話する。一方、Yは描く構えを維持する))
- 10 F : そう そう そう フェリー
- 11 Y : フェリーであるの : 車を載せて ((Fを注視しながら))
- 12 F : そうですね= ((紙を注視したまま、「そうですね」と発話する時、一回頷く))
- 13 Y : =あの : 何だろう (.) あ : 向こう ((「あの」と発話する瞬間、右手を大きく振ると、FはYに視線を向ける))
- 14 F : うん ((視線を紙に戻す))
- 15 Y : 渡って ((発話しながら右手で「渡る」動作の後、Fの紙に視線を向ける))
- 16 F : そうそうそう ((紙を注視したまま))
- 17 Y : あ : : : なるほど ((Fの紙に視線を向けたままYが「なるほど」と発話した直後、Fはボールペンを上げて、再び書く準備をする))

- 18 F : で ダ : : (と) ← ((紙に何かをなぞりながら発話する。一方、YはFがなぞるのを注視する))



((Yは19行目で「あ たぶ : : ん」と発話すると同時に、両手の手のひらをぱっと開き、Fに視線を向ける。その後、小さい声で「あの」と発話すると同時に、視線をFからそらす。一方、Fは、Yが「あ たぶ : : んあの」と発話した時点で、顔を上げてYに視線を向けると同時に、ボールペンを持ち上げて、一旦書くのを止める))

- 19 Y : あ たぶ : : ん あの

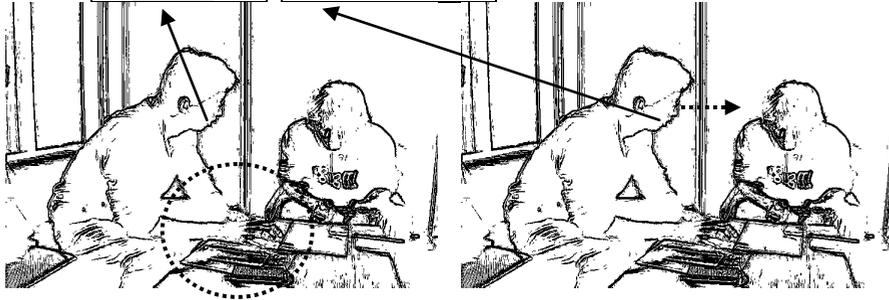


→20 Y : すみません

((Fが顔を上げて視線をYに向けると、Yは「すみません」と発話する。  
その後、右手の人差し指でFの紙を指差す))

→21 F : はい ((「はい」と発話すると同時に、Yが指差しているところを注視する))

→22 Y : あ たぶんあの フェリーのほうが



((「あ たぶんあの」と発話する時、Fの紙を指差す。FはYの指差しているところを注視する。Yは「フェリーのほうが」と発話続けると、右手をFの紙から離し、Fを注視しながら発話する。一方、Fは下を向いたまま))

→23 F : うん ((下を向いたまま頷く))

24 Y : トンネルより (.) あの安い ((「トンネルより」と発話しながら、右手の手のひらを上に向けて低く横に動かし、Fを注視したまま発話する。「あの安い」と発話する間、Fは一瞬Yに視線を向けるが、また紙に戻す))

25 F : うん 安い ((「うん」と頷くと同時に、顔を上げてYに視線を向ける。その後、また視線を紙に戻す))

26 Y : 安い [あ:] : なるほど ((「あ:]」と発話する時、頷く。その後、視線を机や紙に向ける。一方、Fの視線は紙に))

27 F : [うん] ((視線が紙に行く))

28 (.) ((Yによる吸気音が微かに聞こえる))

29 Y : ただ (.) 時間 : : : が : ((Fを注視する。「時間 : : :」と発話すると、Fは一瞬Yに視線を向ける))

30 F : あ : : : 对对对 = ((「あ : : :」と発話する前に首をかしげる。「对对对」と発話する時、頷く))

31 Y : =より : = ((Fを注視したまま))

32 F : =うん ((紙に視線が止まるが、一瞬顔を上げてYを見て頷く))

33 Y : 多く ((Fを注視したまま))

34 F : そう ((下を向いて頷く))

35 Y : あ : : : ((頷いて視線を机のほうに向ける))

36 F : うん ((紙が視線に止まる))

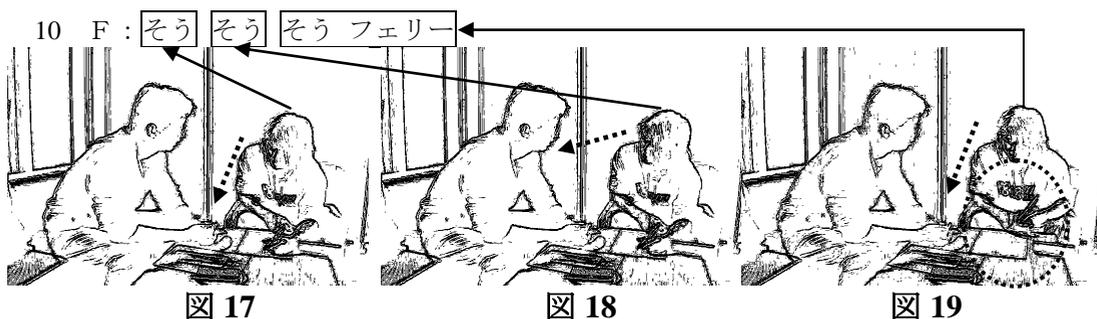
事例1と事例2では、FがYに「質問」した後、Yがそれに「応答」する。なお、Yの応答の発話の中に、「たぶん」の使用が観察される。しかしこの事例3では、Fは、Yに質問はしていない。Fは、自分の個人旅行の物語についてYに話そうとしているのである。「たぶん」の発話が出現するまで、やや長いやりとりが観察され、01行目から18行目まででは、Fが「物語の

語り手」であり、Yは「聞き手」である。19行目の「たぶん」を含む発話まで、Fは、描く構えを維持したままであり、「自分の物語を語る」ことに志向している。

01行目でFが「然後：去(.)青(.)青森」(それから青森へ行って)と、自分の手元の紙に絵を描きながら発話すると、Yは、02行目で「え？」と発話すると同時に、右手の人差し指を出してFが描いているところを指差し、そして「これが：」と発話する。Fは03行目ですかさず「はい」と相槌を打つ。「はい」と相槌を打った時、Fは描く構えを維持したままである。

04行目で発話を続けたYは「あの：：」の後、小さい声で「なんだろう」と発話するが、05行目のFの「ここ？」という確認の発話と重なる。その直後、約1.0秒のポーズが入り、YはFを注視し、Fは描く構えを維持し、二人は一旦停止する。その後、07行目でYは発話を続ける。07行目でのやや長い発話の間、Yは、絶えずFを注視している。一方、Yが07行目で「あの」と発話する時、Fは一旦顔を上げてYに視線を向けるが、その後、また視線を自分の紙に戻す。08行目と09行目では、発話の重なりが見られるが、Fは描く構えを維持したまま頷きながら発話していることが分かる。

Yの09行目での「フェフェフェフェリー」の発話を受けて、Fは10行目で「そうそうそうフェリー」と発話し、その間、一旦顔を上げてYに視線を向けて(図17、18、19)、背を起こし、ボールペンを紙から離して描く動作を止める。



Fの反応を全体的に観察すると、10行目までは、FはYの発話に応答しているが、志向しているのは「紙」であり、「自分の物語」でもある、と見てとれる。実際、11行目の「フェリーであの：車を載せて」という発話に対し、12行目でFは「そうですね」と発話して頷く時も、自分の紙を注視したままである。その直後、13行目でYが「あの：」と発話する瞬間、FはYに視線を一旦向けるが、14行目で「うん」と発話する時、また視線を

紙に戻す。15 行目でYが「渡って」と発話した後も、Fは、紙を注視したまま、16 行目で「そうそうそう」と発話する。このように、Fは「自分の物語を語る」ことへの志向をYに示しているのである。

なお、02 行目から 17 行目までの発話連鎖で、Yは、Fに船（フェリー）にバイクを載せて行ったことを確認し、17 行目で「あ：：なるほど」と理解を提示する。それを受けて、Fは、01 行目での「然後：去（.）青（.）青森」という発話に続けて 18 行目で「で ダ：：（と）」と発話すると同時に、手元の紙に何かをなぞりながら、さらに自分の話を続けようとする。一方、YはFがなぞるのを注視している。ところが、19 行目で、Yは「あ たぶ：：ん」と、小さい声で「あの」と発話する。「あ たぶ：：ん」と発話する同時に、Yは両手の手のひらをぱっと開いて前に出す（図 20 と 21。左はY、右はF）。



図 20



図 21

19 行目でのYの「あ たぶ：：ん」（と小さい声で「あの」という発話を受けて、Fは顔を上げて、Yに視線を向けると同時に、ボールペンを持ち上げ、何かをなぞるのを一旦止める。Yは 20 行目で「すみません」と発話するが、その前後で、Fの顔の向きに顕著な変化が見られる（図 22 と 23）。



図 22

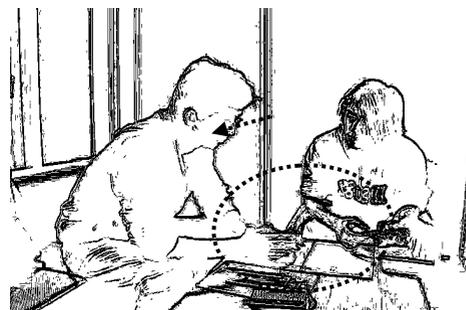


図 23

Fの18行目での「で」は、自分の話を再開することを、Yにアナウンスする表現であり、それと共に、「ダ：：(と)」と発話しながら、手を動かしている。それゆえ、18行目での「で ダ：：(と)」という発話とそれに伴うジェスチャーで、Fは「自分の物語の展開」と「自分の手元(の紙)」に相手(Y)の注意を求めている。

ところが、その時、Yは19行目で「あ たぶ：：ん°あ°」と発話する。Yの発話を受けて、Fは、視線をYに向けた後、直前に再開しようとした話を敢えて自ら中断している。Fは、20行目での「すみません」と22行目での「あ たぶんフェリーのほうが」というYの発話(と伴う指差しのジェスチャー)に対し、「はい」(21行目)と発話して、Yの指差しているところを注視し、下を向いたまま「うん」(23行目)と頷く。また、19行目での「あ たぶ：：ん°あ°」というYの発話とそれに伴う両手のジェスチャーの後、Fは顔を上げてYに視線を向け、ボールペンを一旦持ち上げてなぞるのを止めるのも、「話し手」としてではなく「聞き手」としてYの発話を聞く準備をしている。つまりFは、Yの19行目での「あ たぶ：：ん°あ°」という発話(addresses<sup>13</sup>)の後、「発話権」をYに渡しているのである。実際、YはFの話を中断させたことに対し20行目で「すみません」と発話している。

なお、Yの19行目での「あ たぶ：：ん°あ°」という発話の後に来るのは、17行目Yの「あ：：なるほど」という発話によって一応の終結を見た「フェリーの話」である。このことから、「あ たぶ：：ん°あ°」という発話を通して、Yは「前の話の内容」や「先の話題」へと引き戻している。その後、21行目でFの注意を得て、発話を再開し、「なぜフェリーを利用したか」についてFに確認している。すなわち、Yは19行目での「たぶん」を含む発話の後、発話権を相手(F)から渡され、その後、「前の内容・先の話題へと(Fの注意を)引き戻す」ということを行なっている。その後、Yは22行目での「あ たぶんあのフェリーのほうが」と24行目での「トンネルより(.)あの安い」という発話を通して、「フェリーのほうが、(トンネルより)安いから、フェリーで行ったのですね」という自分なりの解釈について、Fからの承認を求めている。24行目でのYの「トンネルより(.)あの安い」という発話に対して、Fは25行目で「う：ん 安い」とYの話の内容を肯定する応答をしている。このことから、当初の「物語の語り手」であるはずだったFが転じて聞き手として振る舞っていることが分かる。

<sup>13</sup> Schegloff (1972)、Levinson (1983) は、「summonses」と「addresses」とを区別している。前者は、「呼びかけ」などの単独的な言語行為(speech acts)である。それに対し、後者は、会話の途中で相手とのコンタクトを維持したり、相手の注意を引いたりするためなどに用いられ、文脈の中で偶発的に現れるものである。

以上、事例3を通して、「たぶん」を含む発話の後の発話権の交替が起きている様子を分析した。また、19行目での「あ たぶ：：ん°あの°」と、22行目での「あ たぶんあのフェリーのほうが」という二つの発話では、それぞれ違うことが達成されていた。このように、同じ言語形式の「たぶん」が、発話の中に埋め込まれ、それぞれ異なる非言語行動を伴っていて、そして異なる文脈、タイミングで出現することで、話し手と聞き手の次に行なわれることもそれによって異なっていたのである。

#### 4. おわりに

本稿では、自然会話データに見られる三つの事例を通して、「たぶん」と「たぶん」を含む発話連鎖を見てきた。相互行為において会話の当事者たち（YとF）は、発話だけでなく、非言語行動や、物などのリソースの同時的配置（C. Goodwin 2000）を通して、お互いにとって観察可能な方法で、「今自分の行なっていること」と「次に行なわれる（べき）こと」を示し合い、理解を構築し、インタラクションを組織化していた。

同じ副詞（言語形式）としての「たぶん」（を含む発話）であっても、異なる文脈に埋め込まれると、話し手と聞き手が行なわれていることも異なってくると考えられる。決して発話だけを抽出し、字面から判断すれば解釈できるものではない。むしろ、字面だけでは解釈できないことのほうが多い。C. Goodwin (2000) が唱えている通り、会話は、単に会話として捉えるものではなく、人間の行為（human action）として捉える必要がある。本稿第三章のデータ分析では、「答えや意見の提出の準備」の投射、「結論のアナウンス」の投射、そして「発話権の取得／譲渡」と分析したが、いずれも、「たぶん」という副詞の言語形式が使用されたため発話の中で何らかの効果や機能を果たしたというわけでは決してなく、あくまで、個々の文脈の中で会話の当事者たちが「たぶん」をリソースの一つとして、他のリソースとの組み合わせを通して「行なっている（行われている）こと」と「達成している（達成されている）こと」の記述であった。

なお、日本語学の従来副詞「たぶん」についての解説や定義（「推量」、「可能性」ないしは「確信度」など）と、本稿での三つの事例の考察の結果とは大きく異なるものであった<sup>14</sup>。相互行為において、「発話」は、聞き手（の反応）によって発話の産出がしばしば影響される（C. Goodwin 1979）。

<sup>14</sup> 日本語学における副詞「たぶん」の意味用法の分析が「イーティック (etic)」な情報から得た結果（「たぶん」の辞書的意味の記述や、「たぶん」は「...だろう」とは共起するが「...かもしれない」とは共起しない、という文法規則の記述）である。それに対し、相互行為における「たぶん（を含む発話）」の本稿での分析が「イーミック (emic)」な情報から得た結果（「たぶん」が会話の全体の流れの中で実際にどのように他の言語形式や発話とそれに伴う非言語行動などと同時に使用されているかの記述）であると言える。

同じく推量を表す「らしい」に関してもそうである。西阪（2003）が述べているように、話し手が自分の発言を「伝聞」として組み立てている時、必ずしも発言内容そのものの性質とそれに対する確信の程度と関係があるとは限らない。むしろ「その発言が行なっていること」を見ることのほうが重要である。「たぶん」を含む発話（の連鎖）もそうであり、3つの事例の中で、YとFがお互いに向けて行なっていること、そしてYとFによって共同に達成されていることは、必ずしもただ単に「会話の中で、YとFのどちらかが一方的に“たぶん”という副詞を使っていれば、必然的に“推量”や“推測”の“行為”が行なわれている」などといった定式化のようなものではない。また、話し手個人の推量や推測などの個人レベルにとどまる（自己完結的な）認知的作業でもない。相互行為としての会話の中で「たぶん」という副詞を使用して自ら一人で発話を「推量」や「推測」として組み立てようとすればその行為（や解釈）がそのまま成り立つとは限らないからである。話し手の「たぶん（を含む発話）」を、聞き手が「推量」や「推測」として受け止めてさらに（話し手に）理解を示さなければ成立しないのである。このように、話し手と聞き手は、常にお互いに自分の発話に対する相手の反応を受けながら、「たぶん」と非言語行動や他に利用可能なリソースで発話を組み立て、相互的に行為を構築しているのである。

最後に、日本語第二言語話者と中国語第二言語話者の自然会話データを通して言語使用を記述していくことで、日本語第二言語話者の実際の会話の中での文法や発音上の誤りなどの形式的な問題だけ取り出して局所的に観察したり、それを「個人」の問題に帰属させて誤用として分析（ないしは分類）したりするよりも、文脈の中で、「彼ら」は今の発話をお互いにどう解釈し、その次に何を行なうのか、という相互行為の観点から見ていく必要性が再び浮かび上がった<sup>15</sup>。言語の使用を人間（または人間の活動）から切り離さずに考えるためにも、これからも、日本語第二言語話者たちが日本語第一言語話者たちとともに実際に「会話の当事者たち」として「行なっていること」や「達成していること」を（アーカイブ化された）会話データから、さらに多くの事例<sup>16</sup>や多様な活動場面を取り上げて詳細に考察し、会話データに即して（学際的にも批判・批評可能な形で）議論し、記述し続ける必要がある。

<sup>15</sup> 第二言語話者の能力（能力観の変化）については、義永（2008）では詳細に議論されている。

<sup>16</sup> 会話分析（第二言語習得研究における会話分析）において、データから得られた分析の結果（または記述内容）ないし結論の一般化（および定量化）の問題については、森（2004）の立場をとる。

## 付記

本稿は、2009年1月に北海道大学に提出した修士学位論文（未公刊）の一部に加筆および修正を施したものである。拙稿の作成にあたって、ご指導いただいた柳町智治先生、佐藤俊一先生、小河原義朗先生をはじめ、多くの方々々に心より謝意を表したい。経済的支援をくださった（公財）交流協会、また、撮影データの収集を快諾してくれた協力者の方々、入念にネイティブチェックをしていただいた真田万里氏（北海道日本語教育ネットワーク）、コメントをくださった横森大輔氏（京都大学）に厚くお礼申し上げたい。そして貴重なご指摘とご助言をくださった査読委員の先生方に感謝いたします。なお、本稿での間違いや不備はすべて筆者の責任である。

## トランスクリプションに使用する記号についての説明

- 事例の中で、特に注目する行
- 文字** ゴシック体と網掛けは、分析において焦点を当てる箇所
- (( )) 括弧内の文字は、非言語行動についての注釈
- (. ) 発話と次の発話の間に、感知可能なポーズ (pause)
- (1.0) 括弧内の数字は、沈黙の秒数を示す
- :
- 伸ばし音
- ( ) 括弧の中の文字は、聞き取りに確信が持てない部分
- [ 発話や音声の重なりが始まる時点を示す
- ] 発話や音声の重なりが終わる時点を示す
- ? 上昇音調の抑揚
- .h 吸気音
- h 呼気音、笑い
- = 発話と次の発話の間に、切れ目のない接続、ラッチ (latch)
- 。 ° 発話の音量の小さい箇所

## 参考文献

- 茅野直子・秋元美晴・真田一司 (1987). 外国人のための日本語 例文・問題シリーズ1 副詞 荒竹出版
- Goodwin, Charles. (1979). The interactive construction of a sentence in natural conversation. In Psathas, George. (Ed.), *Everyday language: Studies in ethnomethodology*. pp. 97-121. New York: Erlbaum.
- Goodwin, Charles. (1984). Notes on story structure and the organization of participation. In Atkinson, Maxwell J., & Heritage, John (Eds.), *Structures of social action: Studies in conversation analysis*. pp. 225-246. Cambridge: Cambridge University Press.
- Goodwin, Charles. (2000). Action and embodiment within situated human interaction. *Journal of Pragmatics*, 32, 1489-1522.
- 林誠 (2008). 相互行為の資源としての投射と文法—指示詞「あれ」の行為投射的用法をめぐって— *社会言語科学*, 10 (2), 16-28.
- 市川孝 (1976). 副用語 岩波日本語講座 6 文法 I 岩波書店 pp. 219-258.
- 池田佳子 (2009). マスメディアと会話分析—CNN Larry King Live Show の視覚的考察(Visual Analysis)— 言語文化研究叢書, 8, 1-15.
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2001). 初級を教える人のための日本語文法ハンドブック スリーエーネットワーク
- 石神照雄 (1987). 陳述副詞の修飾 寺村秀夫・鈴木泰・野田尚史・矢澤真人 (編) ケーススタディ日本文法 おうふう pp. 96-101.
- 工藤浩 (1982). 叙法副詞の意味と機能 国立国語研究所報告 71 研究報告集 3 秀英出版 pp. 45-92.
- 工藤浩 (2000). 副詞と文の陳述的なタイプ 仁田義雄・森山卓郎・工藤浩 (著) モダリティ 岩波書店 pp. 161-243.
- 串田秀也 (2006). 相互行為秩序と会話分析—「話し手」と「共 - 成員性」をめぐる参加の組織化 世界思想社
- Levinson, Stephen C. (1983). *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 益岡隆志・田窪行則 (1992). 副詞 基礎日本語文法—改訂版— くろしお出版 pp. 41-48.
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 (2002). モダリティ くろしお出版
- 森純子 (2004). 第二言語習得研究における会話分析: Conversation Analysis (CA) の基本原則、可能性、限界の考察 第二言語としての日本語の習得研究, 7, 186-213.
- 森田良行 (1989). 基礎日本語辞典 角川書店

- 西阪仰 (1997). 相互行為分析という視点：文化と心の社会学的記述 金子書房
- 西阪仰 (2003). 相互行為としての『伝聞』 言語, 32 (7), 62-69.
- Pike, Kenneth L. (1967). *Language in relation to a unified theory of the structure of human behavior (2nd Edition)*. The Hague: Mouton.
- Schegloff, Emanuel A. & Sacks, Harvey (1973). Opening up closings. *Semiotica*, 8, 289-327. (北澤裕・西阪仰訳 (1989). 会話はどのように終了されるのか 日常性の解剖学—知と会話— マルジュ社 pp. 175-241.)
- Schegloff, Emanuel A. (1972). Sequencing in conversational openings. In Gumperz, John & Hymes, Dell (Eds.), *Directions in sociolinguistics*. pp. 346-280. New York: Holt.
- Schegloff, Emanuel A. (1984). On some questions and ambiguities in conversation. In Atkinson, Maxwell J., & Heritage, John (Eds.), *Structures of social action: Studies in conversation analysis*. pp. 28-52. Cambridge: Cambridge University Press.
- 高橋太郎他 (2005). 日本語の文法 ひつじ書房
- ten Have, P. (2007). *Doing Conversation Analysis (2nd Edition)*. Thousand Oaks: Sage Publication.
- 上野直樹 (2004). 会話分析 立田慶裕 (編) 教育研究ハンドブック 世界思想社 pp. 104-120.
- Wagner, Johannes. & Gardner, Rod. (2004). Introduction. In Gardner, Rod. & Wagner, Johannes. (Eds.), *Second language conversations*. pp. 1-17. New York: Continuum.
- 山田富秋 (2004). エスノメソドロジー・会話分析におけるメッセージ分析の方法 マス・コミュニケーション研究, 64, 70-85.
- 義永美央子 (2008). 第二言語話者の「能力」—能力観の変遷と第二言語習得研究のパラダイム・シフト— CHAT Technical Reports, 7, 1-15.